

第3章 常三島遺跡・総合科学部1号館エレベーター 新設工事事前調査

第1節 調査の概要

国立大学法人徳島大学常三島キャンパス（第1図2）では、これまでに17次にわたる調査が実施されている。それらにより、近世徳島城下町常三島地区の様相が徐々にあきらかにされつつある。しかし、それらはおもにキャンパス東側の工学部エリアに偏っており、西側の総合科学部エリアでの調査は、2002年に実施された第16次調査（総合科学部3号館地点）のみである。

今回の調査は、総合科学部エリアでは2度目の調査であり、常三島遺跡としては、第18次調査にあたる。

調査期間は2008年1月16日～1月21日で、調査面積は約35m²である。調査は徳島大学埋蔵文化財調査室（室長 定森秀夫総合科学部准教授）が当たった。調査担当者は中原計（埋蔵文化財調査室助教）で、安山かおり（施設マネジメント部技術補佐員）がこれを助けた。

第2節 調査経過

1月16日から重機掘削を開始し、17日からは重機掘削面の精査を開始した。しかし、重機により攪乱部分を除去した段階で、武家屋敷地形成以前の層と考えられる砂層が調査区の全面にわたって検出された。17日には、調査区の北壁、西壁沿いにトレンチを設け、工事による土層攪乱が及ぶ深さまで掘下げ、砂層がその範囲まで及んでいることを確認し、土層断面の写真撮影をおこなった。18日に、重機掘削が終了し、全景写真撮影をおこなった後、調査区に南北・東西の十字にトレンチを設けて掘下げをおこない、調査区全面において、砂層が続いていることを確認した。その後、調査区の平面図、土層断面図を作成し、21日に調査を完了した。

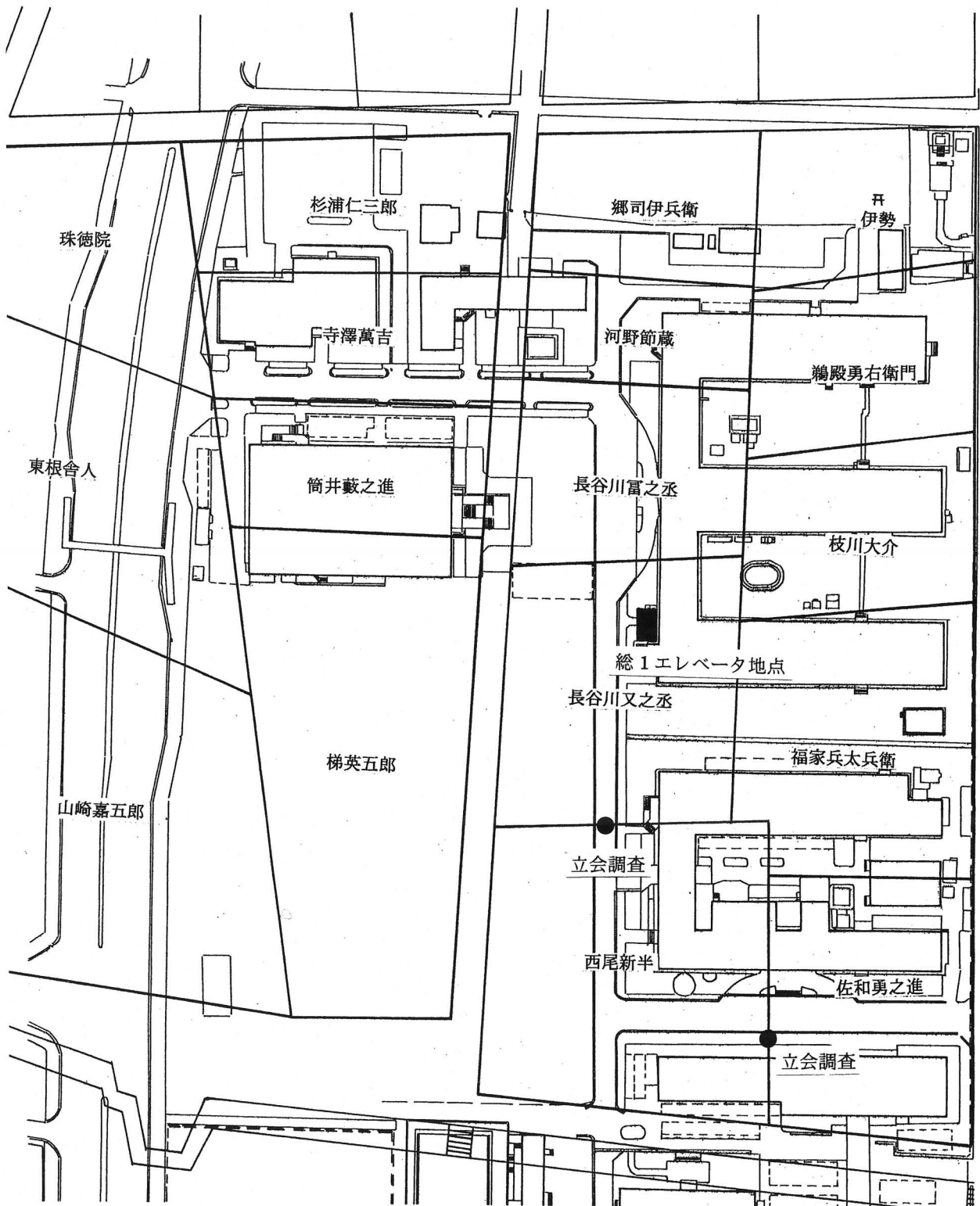
1月22日～28日には、調査区南側において、総合教育研究棟（B棟）改修機械設備工事に伴う立会調査をおこない、19世紀の屋敷境溝を確認し、平面図を作成した。また、同工事に伴い2月27日～28日においておこなった立会調査においても19世紀の屋敷境を確認し、記録作業をおこなった。それぞれの位置関係は第16図に示したとおりである。

第3節 調査成果

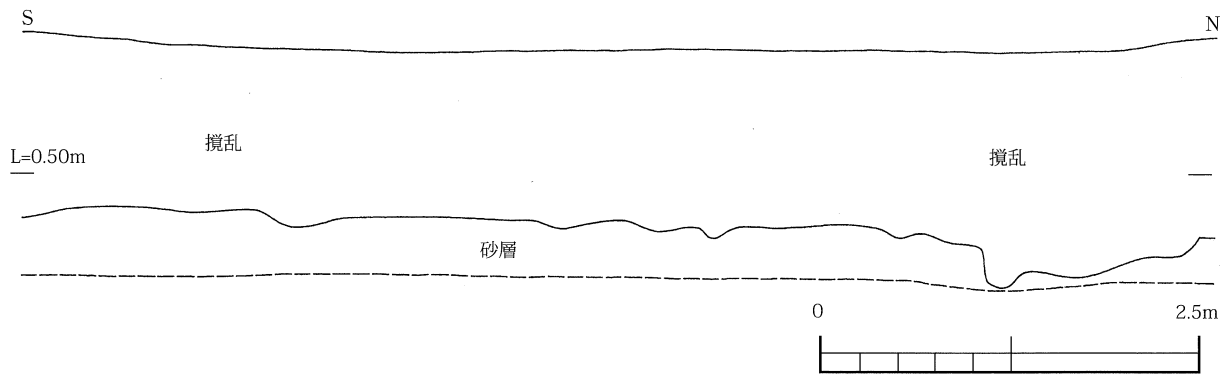
本調査では、攪乱部分を除去した、TP0.2m付近において、武家屋敷地形成以前の層と考えられる砂層が検出された（第17・19図）。砂層は調査区全面におよび、遺構はまったく検出されなかった（第19図下段）。砂層は、掘削予定のTP-0.3mを越えて堆積していることを確認し、湧水のため、それより下の調査は断念した。本調査区においては、遺構面および遺物包含層は検出されなかった。

既往の第16次調査では、TP0.2mにおいては、砂層は検出されておらず、もっとも高い場所で、TP-0.1mである。また、TP0m以下の場所にも遺構が形成されており、本調査区とはまったく様相が異なっている。

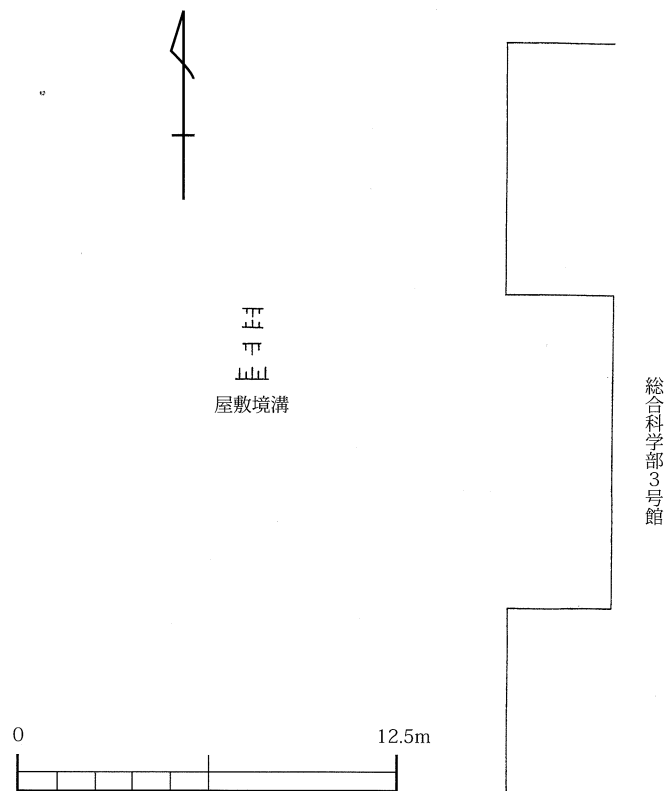
本調査終了後、引き続いておこなった立会調査において、19世紀の屋敷境が検出された（第20図）。絵図によると、長谷川又之丞と南側の西尾新平の屋敷境にあたっている（第16図）。屋敷境は、2条の素掘りの溝であり、北側が幅0.6m、南側は1.1mである（第18図）。発掘調査ではないため、遺構の完掘はおこなっていない。遺構の検出面はTP0.2mであり、上部の0.15mが工事によって破壊されたが、遺構の大部分は地下に保存されていると考えられる。また、TP0.4m以下の部分に遺物包含層が残存していることも確認された。ただし、上部からの攪乱も多く、すでに破壊されている部分が多い。また、TP0.2m付近から本調査においても確認された砂層がみられる部分もあり、砂層の厚さに差があることが確認された。



第16図 調査地点



第17図 総合科学部1号館エレベーター地点西壁土層図



第18図 屋敷境検出地点平面図

また、その後におこなった立会調査においても19世紀の屋敷境などの遺構を検出している（第20図）。絵図によると、西尾新平と佐和勇之進との屋敷境にあたっている（第16図）。屋敷境は、2条の素掘り溝であり、幅は西側が2.5m、東側が0.8mである。検出面はTP0.65mである。屋敷境以外の遺構としては、西尾家屋敷地内の溝と佐和家屋敷地内の土坑が検出された。

第4節 出土遺物の概要

本調査においては、遺物はわずかに12点出土したにとどまり、ほとんどが攪乱部分からのものである。しかし、特筆すべき遺物として、古墳時代初頭の甕の口縁部が出土している。出土層位は砂層であり、砂層の形成時期についての示唆を与えてくれるものであるといえよう。

立会調査においては、屋敷境溝から、肥前系磁器のほか、珉平焼の小判皿、大谷焼の甕、肥前系の甕など19世紀の遺物がコンテナ4箱分出土した。その他、遺物包含層や攪乱部分からも少量の遺物が出土している。

第5節 まとめ

本調査における成果としては、まず、屋敷地形成以前に堆積していた砂層の凹凸の幅が非常に大きいことがあきらかになったことがあげられる。本調査区では、砂層の堆積が厚く、その上に形成されていた遺構は、その後の攪乱によって、破壊されてしまったと考えられる。一方、堆積の薄かった第16次調査区では多くの遺構が攪乱を免れ、保存されていた。これらのことから、この地区では屋敷地として利用する際の造成に差があったことがうかがえる。このような状況は、本調査終了後におこなった立会調査でも確認することできた。そのため、これまで遺構は地表下1m程度のところから検出し始めるということであったが、地点によってはそれよりも浅い深度（今回の場合は地表下70cm）からも検出されるため、今後この点を留意する必要がある。

次に、砂層の形成時期については古墳時代初頭の土器が出土したことから推測することができよう。この土器は、多少は摩滅しているものの、遠方から流されてきたものとは考えにくいことから、古墳時代初頭には砂層が形成されていた可能性がある。

立会調査における成果では、屋敷境の位置や構造が判明したことがあげられる。屋敷境の位置は、絵図と現代の地図との重ね合わせから推定された場所とほぼ一致している。総合科学部エリアにおける屋敷境は第16次調査においても確認されており、本例が2例目、3例目にあたる。

以上が、本調査および立会調査の成果である。当初の目的であった、武家屋敷地利用の実態解明について、わずかな成果をあげることができ、遺跡の形成についても多少の知見をえることができた。総合科学部エリアにおける調査は少なく、遺構の残存状況も地点によって差がある。そのため、実態の解明は困難であることが予想されるが、今後も発掘調査、立会調査からえられた情報を積み重ねていく必要がある。



調査区北壁



調査区南壁（部分）



全景



屋敷境溝検出状況



屋敷境溝検出状況



屋敷境溝検出状況

第20図 総合科学部立会調査検出屋敷境溝